

フクニチ新聞 26th. Jul. 1977

パラダイスへの招待

地元出身で、パリで活躍している桜井孝身さんが一時帰国、福岡画廊（福岡市中央区大名二 斉藤ビル三階）で個展を開いている。（八月三日まで）。この世のものと思えない画像が、幻想の世界に誘う。

“パラダイスへの招待”が、ここ十年追求しているテーマである。デフォルメされ、省略された特異な人間像。それが彼岸に浮遊し、見るものを誘（いざな）っているようだ。かっちり平面化された表面処理、コントラストの効いた色彩が、かえってその深みを感じさせる。

桜井さんは、一九五〇―六〇年福岡を中心にした美術運動 “九州派” の中心的存在の一人。十四年前にアメリカサンフランシスコに渡り、当地の芸術運動の先端に立って十年間、その後、パリに移り、ここでも前衛的作家の一つの中心的存在として活躍している。絶えず芸術運動ないし絵画の先端に身を置き続けるその裏には、きびしい修業の中で得た、理念ともいべき考え方を確立しているからであろう。絵をして語らしめる。これはよく言われること。

言葉はいらないというわけだが、実は言葉として語る、つまり意識化させる作業が必要ではないか。語った言葉は自分に返り、その絵を成長させる原動力にもなり、自らの思いを意識化、理論化することで絵画研究の深化をはかる。

桜井さんはさめた理念と熱く豊かな想念、この永遠に矛盾する二つの接近を目指して営為を積みかさねているようだ。この十月には、パリの有数の画廊、ランペール画廊が招待個展を催す。国際画壇に直接影響を与える専門画廊の自主企画に入る日本人画家は、まことにまれ。その実力が本場で認められたということができよう。

桜井さんは「自分の絵はこれだ、と一枚で叫びたい。しかし、描きあげた瞬間から苦惱が始まる」という。もし、完成された絵というものがあるとすれば、画家は永遠にそれに向かって努力する存在といえよう。一枚の絵は、描きあげた瞬間からその画家にとっては不満のかたまりにすぎないともいえる。桜井さんの “パラダイス” への無限の探究は、今後どのような展開を見せるのだろうか。